

特定の他者ごとに特有用な内的作業モデルを想定した 愛着スタイルと対人不安の関連の検討

泉 玲*・石田 弓*

Investigation of the relationship between attachment style and social anxiety in the internal working model related to specific others

Rei Izumi*, Yumi Ishida**

This study examines the adult attachment style and internal working model related to Bowlby's attachment theory (1973/1991). Several studies have investigated the relationship between attachment and social anxiety. However, this study investigates the relationship between not only attachment style and trait social anxiety but also specific attachment style and anxiety for specific others, specifically close friends and acquaintances. This was founded on the hypothesis that there are other models of specific others and general internal working models. Using scales, [Remark 1] we investigated general attachment style, rated anxiety about others, and allowed subjects to direct these toward specific others to investigate particular attachment style and social anxiety. Then, using multiple regression analysis, we discovered that this internal working model influences anxiety about specific others only in the case of a close friendship, which suggested that the specific model is shaped during the process of becoming close to friends.

Key words : Attachment, Internal Working Model, Social anxiety

問題

Bowlby (1991 黒田・岡田・吉田訳 1995) は、乳児が生存していくために養育者との間で結ぶ特別な関係を愛着理論として発表した。これによると、乳児は無力な状態で誕生し、生存のためには母親など養育者からの働きかけが不可欠であり、乳児が生存のために養育者を求め、養育者がそれに応答することを通じて愛着関係を形成する。しかし、この関係は乳幼児期のみに限って重要なのではなく、この時期の養育者との関係がその後の発達にも影響していくのである。これを Bowlby 1991 黒田他訳 1995) は内的作業モデル (Internal

*広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

Working Model) という概念で説明している。内的作業モデルとは、乳児と養育者との関係の中で内在化されてできるモデルのことで、他者との関係に関する一般的イメージである。このモデルは自分が他者から世話され保護されるかどうかという自己に関するモデルと、他者が自分の要求に応じてくれるかどうかという他者に関するモデルの2つからなる。前者のモデルは自己観、後者のモデルは他者観とも呼ばれる。

各個人が持つ内的作業モデルの様式に対応した行動スタイルが対人場面で現れることがこれまでの研究によって分かっている。このような行動スタイルは愛着スタイルと呼ばれる。内的作業モデルは乳幼児期だけでなく、思春期・青年期以降の対人関係にも影響していることから、対人場面における様々な観点からの研究が主に成人を対象に多くなされている。初めは成人の恋愛関係において表出する愛着スタイルについての研究 (Hazan & Shaver, 1987 など) が主であった。わが国での成人愛着スタイルに関する研究は恋愛関係に限らず、異性の友人 (金政・大, 2003a), 同性の友人 (金政, 2007) など特定の対人関係における適応性や、一般的な社会適応性 (金政・大, 2003b) などに関するものであった。

このように、従来の成人の愛着スタイルに関する研究は、対人関係における適応的な側面との関連についてのものがほとんどであった。しかし、対人関係のネガティブな側面として対人不安との関係について研究したのも近年いくつかみられる (西村, 2008; 嶋野・鈴木・菅原, 2003)。

西村 (2008) では、特性レベルの対人不安傾向と愛着スタイルの関係だけでなく、特定の他者との関係における不安経験と愛着スタイルの関係も調べている。ここでは、他者との関係性という側面に注目して対人不安と愛着スタイルの関係を調べており、特定の他者として「重要な他者」と「半知り合いの他者」を挙げている。これは、対人不安 (およびその下位概念とも捉えられる羞恥心) が半知り合いの状態にある他者 (あまり知っていないわけでもないが、知らないと言い切ることもできないような相手) との関係において最も強く喚起されるという知見 (佐々木・菅原・丹野, 2005; 堤, 1992; 山際・堀, 1991) をもとにしている。愛着スタイルと重要他者への不安経験との関連については、概念的に見てかなり強いものになると考えられていたが、西村 (2008) の結果では相関係数自体はそれほど高いものではなかった。このことについて西村 (2008) は、関係に特有な内的作業モデルを考慮した検討の必要性を提言している。

関係に特有な内的作業モデルの存在については Pierce & Lydon (2001) や Overall, Fletcher & Friesen (2003) の研究で明らかにされている。まず、Pierce & Lydon (2001) は、内的作業モデルには包括的なモデルと特定の関係に固有のモデルが存在し、両者には弱い相関があり、互いに影響し合っているものの、基本的に別個のモデルであるという構造を提唱した。これを受け Overall et al. (2003) は、包括的モデルの下に関係に特有の個々のモデルが存在するという階層モデルを想定した。

西村 (2008) の研究では、対人不安については特性レベルのものと関係に特有な不安経験に分けていたが、愛着スタイルは1つのスタイルしか測定されなかった。そのため、対

人不安は関係ごとの傾向を測定していたにも関わらず、愛着スタイルの方は包括的なモデルと想定されるスタイルしか測定されなかったために愛着スタイルと重要他者との間の相関が弱かったのではないかと考察している。そこで、Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) のような包括的モデルと関係に特有のモデルが存在するという知見から、対人不安だけでなく愛着スタイルについても他者との関係性を考慮した検討が必要であると述べている。

以上の西村 (2008) の問題提起を踏まえ、本研究では対人不安と愛着スタイルの両方について他者との関係性を考慮した検討を行うことを目的とする。他者との関係性としては重要他者だけでなく、西村 (2008) と同じ半知り合いの他者も検討していく。対人不安についても西村 (2008) に従って、特性レベルの対人不安傾向とともに重要他者や半知り合いの他者との間における不安経験を測定する。

ここで、異なる対象への愛着スタイルをどのように測定するかが問題となるが、本研究では強制選択式と呼ばれる尺度を用いる。強制選択式の尺度とは、各愛着スタイルのプロトタイプを説明する文章を読み、それぞれのタイプに自分がどの程度当てはまるか、あるいはどのタイプに最も当てはまるかを回答するものである (中尾・加藤, 2003)。特定他者との間における愛着スタイルを測定した Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) の研究では、どちらも強制選択式の尺度であったため、本研究でも強制選択式の尺度を使用することとした。これらの研究で強制選択式の尺度が使われていたのは、複数の特定他者を回答者に想定させながら回答を実施していたため、簡便さが必要となるからである。そこで、同じように特定他者を想定させる本研究でもこれに倣うこととした。

また、愛着スタイルを測定する場合、愛着スタイルのカテゴリー化の方式も問題となる。本研究では、Bartholomew & Horowitz (1991) によって考案された安全型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の4分類の愛着スタイルを用いる。この4種類の愛着スタイルは、内的作業モデルの自己観、他者観の特徴から、自己観/他者観とポジティブ/ネガティブの2次元で愛着スタイルを捉えている。

4類型愛着スタイルは、その測定結果から自己観と他者観の性質に還元することもできる。西村 (2008) で使用していた尺度が自己観と他者観の2次元で愛着スタイルを捉える尺度を使用していたため、本研究でも自己観と他者観で捉えることのできる4カテゴリータイプのものを使用する。

本研究では、内的作業モデルには包括的なモデルと他者との関係ごとに特有なモデルが存在するという仮説 (Overall et al., 2003 ; Pierce & Lydon, 2001) に基づき、対人不安と愛着スタイルの関係を他者との関係性に着目して検討していくことを目的とする。愛着スタイルを包括的モデル、半知り合いの他者モデル、重要他者モデルに分けるとともに、対人不安も特性レベル、半知り合いの他者に対する不安経験、重要他者に対する不安経験に分け調査を行う。その上で、包括的愛着スタイルが特性レベルの対人不安傾向に与える影響を分析する他、包括的モデルと半知り合いの他者モデルが半知り合いの他者への不安経験を

に与える影響、包括的モデルと重要他者モデルが重要他者への不安経験に与える影響を分析する。半知り合いの他者や重要他者の分析でも包括的愛着スタイルの影響を分析対象にするのは、包括的な作業モデルは特定他者との間の愛着スタイルにもある程度影響を及ぼすという Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) の知見を考慮したためである。

予想される結果として、もし包括的な愛着スタイルの他に他者ごとに特有の愛着スタイルが存在するならば、同じ尺度でこれらを測定した時、それぞれの測定結果間で差が出るはずである。対人不安と愛着スタイルの関係では、Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) 同様、本研究でも特定他者の愛着スタイルだけでなく、包括的愛着スタイルも対人不安の経験へ影響を与えていると予想される。

方法

調査対象 大学生を対象に調査を行った。講義時間を利用することによる無作為抽出法、および縁故法、スノーボール法によってサンプリングを行った。有効回答者数は148名であった(男性が69名、女性が73名、性別不明が6名)。平均年齢20.06歳($SD=1.04$)。

調査手続き 講義の時間を使い無記名自記式質問紙を集団で実施し、その場で回収した。

質問紙の構成 特性レベルの対人不安傾向を調べるために堀井・小川(1996)の対人恐怖心性尺度を用いた(30項目,7件法)。得点が高い程対人恐怖心性の傾向が高いことを示す。この尺度は質問Ⅰで使用した。

特定の他者との間の対人不安経験を調べる尺度については、西村(2008)に従い清水・今栄(1981)のSTAI日本語版の状態不安尺度から、Marteau & Bkker(1992)のSTAI短縮版を参考に、「平常である」、「緊張している」、「リラックスしている」、「満足している」、「心配である」、「ひどく興奮しろうばいしている」の6つの項目を使用した。4段階評定で得点が高い程、対人場面での不安状態が強いことを示す。この尺度は質問ⅢとⅤで使用した。

愛着スタイルを測定する尺度は、Bartholomew & Horowitz(1991)が作成し加藤(1998)が邦訳した「関係尺度」を用いた(4項目,7件法)。得点が高い程、各愛着スタイルに当てはまる度合いが高いことを示す。この尺度は質問Ⅱ、Ⅳ、Ⅵで使用した。

質問ⅢとⅣでは半知り合いの他者を想定させた上で質問に回答させるため、質問ⅡとⅢの間に次の教示文を掲載した。教示文は「次のページの質問に答えて頂く前に、あなたの周りにいる同世代の知人(同じコース・専攻、あるいは同じサークルやアルバイトなどに所属している人)の中から、これまであまり話をしたことがない人を一人思い浮かべてください。思い浮かべることができたら、次のページに進んでその人のことを思い浮かべたまま質問ⅢとⅣに回答してください」とした。

質問Ⅲに回答させる際も各項目が示す状態を、思い浮かべた人との間で過去1ヶ月の間にどの程度経験したかを回答するように示した。質問Ⅳの教示文では、先程思い浮かべさせた人との関係の中で、各愛着スタイルにどのくらいよくあてはまるかを回答するように

示した。

質問ⅤとⅥでは、重要他者を想定させた上で質問に回答させるため、質問ⅣとⅤの間に次の教示文を掲載した。教示文は「今度は先程とは別の人を思い浮かべて頂きます。次のページの質問に答えて頂く前に、あなたの周りにいる同世代の知人（同じコース・専攻、あるいは同じサークルやアルバイトなどに所属している人）の中から、普段よく話をする人を一人思い浮かべてください。ただし恋人以外の人です。思い浮かべることができたら、次のページに進んでその人のことを思い浮かべたまま質問ⅤとⅥに回答してください」とした。

質問Ⅴと質問Ⅵの教示文はそれぞれ質問Ⅲ、質問Ⅳと同じであった。

質問ⅠからⅥの他、フェイス項目を付して性別、年齢、学年、学部・コース（専攻）を質問した。

結果

尺度得点の整理 包括的、半知り合いの他者、重要他者の各愛着スタイル（質問Ⅱ、Ⅳ、Ⅵで質問したもの）については、原版（Bartholomew & Horowitz, 1991）の方法に基づき、自己観得点と他者観得点を算出した。自己観得点は、「(安全型得点+拒絶型得点)-(とらわれ型得点+恐れ型得点)」という式で算出し、他者観得点は、「(安全型得点+とらわれ型得点)-(拒絶型得点+恐れ型得点)」という式で算出した。特性レベルの対人不安傾向（質問Ⅰで質問したもの）については、全項目（因子分析の結果除外された項目を除く）の平均を対人不安特性得点として算出した。また、各因子別の得点は各因子を構成する項目の平均とした。特定他者との対人不安経験（質問ⅢとⅤで質問したもの）については、各項目の得点を合計（一部逆転項目）したものを対人不安経験得点として算出した。各得点に関する記述統計データは、愛着スタイルは Table 1 に、対人不安は Table 2 に示した。

3つの愛着スタイル間の分析 3つの関係尺度に回答していた143名を分析対象として反復測定による分散分析を行い、自己観得点と他者観得点についてそれぞれ3種類の愛着スタイルに差がみられるかを男女別に検討した。男女とも自己観と他者観の両方において1%水準で有意差が見られた（男子自己観： $F(2,67)=25.94$ 、男子他者観： $F(2,67)=21.70$ 、女子自己観： $F(2,72)=24.93$ 、女子他者観： $F(2,72)=30.54$ ）。多重比較の結果、男子の自己観における包括的モデルと半知り合いの他者モデルとの間を除く全てに有意差が見られた。

対人不安特性得点の因子分析 対人恐怖心性尺度に回答のあった143名を分析対象に因子分析を行い、対人不安特性の因子を確認した。最小二乗法によるプロマックス回転で因子分析を行い、先行研究（堀井・小川, 1996）に従って6因子に固定して因子を抽出した。項目の構成が概ね堀井・小川（1996）のものと合致していたため、堀井・小川（1996）を参考に因子の命名を行った。第1因子を「F1:集団に溶け込めない」、第2因子を「F2:目線が気になる」、第3因子を「F3:集団内における発言不安」、第4因子を「F4:継続力の欠如」、

第5因子を「F5:日常的な疲労感」、第6因子を「F6:自分や他人が気になる」とした (Table 3)。因子間相関は Table 4 に示した。信頼性係数は $\alpha = .953$ であった。なお、項目 13 と 16 は因子寄与率がどの因子においても $<.40$ であったため分析対象から除外した。

Table 1
愛着スタイル得点の記述統計

	男子				女子			
	最小値	最大値	平均値	SD	最小値	最大値	平均値	SD
包括的モデル自己観	-7	7	-0.96	3.23	-7	7	-0.92	3.26
半知り合い他者モデル自己観	-9	8	-0.5	3.68	-9	8	-0.48	3.76
重要他者モデル自己観	-6	9	1.01	3.35	-6	9	1.05	3.38
包括的モデル他者観	-9	9	0.78	3.62	-9	9	0.8	3.59
半知り合い他者モデル他者観	-12	9	0	3.46	-9	10	2.86	3.51
重要他者モデル他者観	-9	10	2.84	3.48	-12	9	0.05	3.51

Table 2
対人不安得点の記述統計

	男子				女子			
	最小値	最大値	平均値	SD	最小値	最大値	平均値	SD
対人不安特性	1.04	6.75	3.69	1.15	1.46	6.71	3.55	1.05
半知り合い他者との不安経験	6	21	13.63	3.17	6	21	13.18	3.32
重要他者との不安経験	6	18	9.25	3.47	6	17	8.85	2.89

Table 3
対人不安特性の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
F1 : 集団に溶け込めない ($\alpha = .912$)							
19 集団のなかに溶け込めない	.890	-.041	.163	.076	-.176	-.072	.874
7 グループでのつき合いが苦手である	.889	-.048	.050	-.095	.015	.026	.844
27 人との交際が苦手である	.872	.188	-.090	.054	-.131	-.116	.811
29 仲間のなかに溶け込めない	.788	.078	.006	.091	-.033	-.016	.833
2 人が大ぜいいると、うまく会話のなかに入っていけない	.508	-.126	.304	-.094	.151	.151	.702
12 引っ込みじあんである	.499	-.084	.157	.060	.082	.082	.665
F2 : 視線が気になる ($\alpha = .892$)							
17 人と目を合わせていられない	.149	.888	.058	-.156	.097	-.168	.868
24 顔を見られるのがつらい	-.188	.801	.117	.201	-.045	.022	.884
5 人の目を見るのがとてもつらい	.146	.766	.021	-.311	.229	-.093	.770
22 顔をジューッとみられるのがつらい	-.155	.733	.103	.141	-.006	.100	.797
15 人と話をするとき、目をどこにもついでいいかわからない	.285	.604	-.091	-.086	.000	.125	.773
F3 : 集団内における発言不安 ($\alpha = .863$)							
20 人がたくさんいるところでは気恥かしくて話せない	.247	-.006	.866	-.097	.004	-.007	.945
21 人前に出るとオドオドしてしまう	-.053	.179	.635	.156	-.066	.029	.776
30 大ぜいの人のなかで向かい合って話すのが苦手である	.136	.166	.559	.099	-.018	-.058	.796
10 会議などの発言が困難である	.039	.067	.428	.160	.232	-.063	.623
F4 : 継続力の欠如 ($\alpha = .805$)							
18 意志が弱い	.079	-.078	.099	.684	-.125	.140	.778
6 計画を立てても実効がとまなわない	-.076	-.021	.184	.670	.184	-.219	.779
28 根気がなく、何事も長続きしない	.165	-.003	-.177	.636	.243	-.207	.661
26 すぐに気持ちがあくじける	-.001	-.118	.249	.583	.005	.190	.761
F5 : 日常的な疲労感 ($\alpha = .759$)							
1 いつも頭が重い	-.235	.122	.081	-.119	.682	.212	.708
9 いつも疲れているような感じがする	-.119	.118	.062	.276	.608	-.194	.694
8 充実して生きている感じがしない	.279	-.067	-.168	.221	.566	.083	.821
11 何をやってもうまくいかない	.081	.025	.072	.381	.460	.085	.774
F6 : 自分や他人が気になる ($\alpha = .805$)							
4 人と会うとき、自分の顔つきが気になる	-.047	-.055	-.010	-.298	.345	.880	.839
3 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる	.005	-.130	.040	.076	-.069	.737	.705
25 自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう	-.018	.241	-.031	.198	-.210	.648	.801
14 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう	.315	.237	-.155	.093	.031	.431	.759
累積寄与率	43.96	50.14	55.82	60.61	65.22	68.85	

Table 4
対人不安の因子間相関

因子	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1						
F2	.632					
F3	.588	.591				
F4	.574	.561	.585			
F5	.443	.391	.266	.288		
F6	.541	.565	.488	.458	.257	

包括的愛着スタイルと対人不安特性の分析 質問 I と II の両方に回答していた 137 名を分析対象に、男女別に包括的愛着スタイルと特性レベルの対人不安傾向の関係について、包括的モデルの自己観得点と他者観得点を説明変数、対人不安特性の全体の得点および各因子得点を目的変数にした重回帰分析を強制投入法で行った。その結果、男女ともに特性レベルの対人不安傾向についても各因子得点についても、いずれも回帰式、および自己観得点と他者観得点の対人不安への影響は 1%水準、または 5%水準で有意であった (男子は Table 5, 女子は Table 6)。

質問 I と III と IV の全てに回答している 141 名を分析対象として、男女別に包括的モデルの自己観得点、他者観得点、および半知り合いの他者モデルの自己観得点、他者観得点を説明変数に、半知り合いの他者への不安経験得点を目的変数にした重回帰分析をステップワイズ法で行った (男子は Table 7, 女子は Table 8)。その結果、男子では包括的モデルの他者観のみが残り、他の変数は除外された。回帰式は 5%水準で有意であった ($F(1,64) = 8.64$)。女子では半知り合い他者モデルの自己観のみが残り、他の変数は除外された。回帰式は 1%水準で有意であった ($F(1,66) = 18.37$)。

質問 I と V と VI の全てに回答していた 141 名を分析対象として、男女別に包括的モデルの自己観得点、他者観得点、および重要他者モデルの自己観得点、他者観得点を説明変数に、重要他者との不安経験得点を目的変数にした重回帰分析をステップワイズ法で行った (男子は Table 9, 女子は Table 10)。その結果、男女とも、包括的モデルの自己観と他者観が除外された。回帰式は男女とも 1%水準で有意となった (男子: $F(2,64) = 6.04$, 女子: $F(2,66) = 12.76$)。

Table 5

包括的愛着スタイルと対人不安特性の重回帰分析の結果 (男子)

目的変数	説明変数 (包括的愛着スタイル)	標準偏回帰係数 β	説明率 R^2	F 値 自由度(2,61)
対人不安傾向全体	自己観得点	-.459**	.364	18.45
	他者観得点	-.378**		
F1 集団に溶け込めない	自己観得点	-.438**	.387	20.26
	他者観得点	-.426**		
F2 視線が気になる	自己観得点	-.422**	.239	10.56
	他者観得点	-.258*		
F3 集団内における発言不安	自己観得点	-.423**	.212	9.21
	他者観得点	-.308†		
F4 継続力の欠如	自己観得点	-.312**	.191	8.19
	他者観得点	-.320**		
F5 日常的な疲労感	自己観得点	-.103	.091	4.05
	他者観得点	-.322*		
F6 自分や他人が気になる	自己観得点	-.571**	.452	26.13
	他者観得点	-.332**		

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 6

包括的愛着スタイルと対人不安特性の重回帰分析の結果 (女子)

目的変数	説明変数 (包括的愛着スタイル)	標準偏回帰係数 β	説明率 R^2	F 値 自由度(2,64)
対人不安傾向全体	自己観得点	-.400**	.257	12.07
	他者観得点	-.244*		
F1 集団に溶け込めない	自己観得点	-.184	.150	6.64
	他者観得点	-.325*		
F2 視線が気になる	自己観得点	-.361**	.234	10.78
	他者観得点	-.263*		
F3 集団内における発言不安	自己観得点	-.284*	.116	5.19
	他者観得点	-.177		
F4 継続力の欠如	自己観得点	-.326*	.113	3.95
	他者観得点	-.030		
F5 日常的な疲労感	自己観得点	-.267*	.128	5.70
	他者観得点	-.218†		
F6 自分や他人が気になる	自己観得点	-.571**	.346	17.90
	他者観得点	-.089		

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7

半知り合いの他者への不安経験得点を目的変数とした重回帰分析の結果 (男子)

目的変数	説明変数	標準偏回帰係数 β	説明率 R^2
半知り合い他者不安 経験得点	包括的他者観得点	- .347**	.107

** $p < .01$

Table 8

半知り合いの他者への不安経験得点を目的変数とした重回帰分析の結果 (女子)

目的変数	説明変数	標準偏回帰係数 β	説明率 R^2
半知り合い他者不安 経験得点	半知り合い自己観得点	- .469**	.208

** $p < .01$

Table 9

重要他者への不安経験得点を目的変数とした重回帰分析の結果 (男子)

目的変数	説明変数	標準偏回帰係数 β	説明率 R^2
重要他者不安経験 得点	重要他者自己観得点	- .451**	.264
	重要他者他者観得点	- .299**	

** $p < .01$

Table 10

重要他者への不安経験得点を目的変数とした重回帰分析の結果 (女子)

目的変数	説明変数	標準偏回帰係数 β	説明率 R^2
重要他者不安経験 得点	重要他者自己観得点	- .256*	.263
	重要他者他者観得点	- .389**	

** $p < .01$, * $p < .05$

考察

3種類の愛着スタイルについて 3種類の愛着スタイル間の差について、自己観においても他者観においても有意差が見られた。これは、愛着スタイルは包括的なモデル、重要他者のモデル、半知り合いの他者のモデルが別々のものであることを示している。このことから、Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) の知見である「内的作業モデルには包括的なモデルの他に他者との関係ごとに特有のモデルが存在する」という仮説が支持された。

ただし、男子の自己観における分析の結果、包括的自己観と半知り合いの他者への自己観の間のみ有意差が見られなかった。このことから、男子では自己観のみ包括的なものと半知り合いの他者へのものがほぼ同じモデルを形成していると言える。一方、他者観では包括的なモデルと半知り合いの他者のモデルが別々に存在すると言える。

Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) は包括的なモデルをプロトタイプにして特定他者のモデルが新たに形成されると述べているが、半知り合いの他者モデルの自己観で本研究のような結果が見られたのは、男子の半知り合いの他者モデルがまだ完成していないからではないかと考えられる。すなわち、モデルの枠組み自体はできているが、まだ半知り合いの他者という特定の人物に対するモデルとして分化しておらず、包括的モデルと同じ形をしているという状態である。一方、他者観の方では包括的モデルと半知り合いの他者モデルとの間で差が見られたことから、他者観は既に特有のモデルが形成されていると考えられる。また、自己観でも半知り合いの他者モデルと重要他者モデルの間では有意差が見られたことから、関係が半知り合いの状態から親密になっていく過程で自己観が分化していくと推測できる。したがって、特定他者のモデルは自己観と他者観が同時進行で形作られるのではなく、どちらか一方が先に完成し、もう片方がそれに引き続いて形作られるという形成過程の時間差がある可能性が考えられる。ただし、特定他者モデルが単なる時間経過で形成されるのか、それとも相手との距離が縮まることで形成されるのかは本研究では明らかにできなかった。

一方、女子では自己観も他者観も、3種類の愛着スタイル間全てに有意差があった。男子では有意差のなかった自己観の包括的モデルと半知り合いの他者モデルの間でも、女子では有意差があったことから、特定他者のモデルの形成の早さ、あるいは包括的モデルからの分化し易さに男女差があることが示唆された。

包括的愛着スタイルと対人不安特性の関係 対人不安特性全体の得点と包括的愛着スタイルの関係では、男女とも自己観、他者観の両方が不安特性に影響を与えており、自己観や他者観がネガティブなほど不安特性の傾向が強くなるという結果になった (Table 5,6)。

因子別に見てみると、男子ではほとんどの因子において自己観、他者観の両方からの影響が見られた (Table 5)。ただし、F5「日常的な疲労感」のみ自己観では有意な影響が見られず、他者観のみが影響していた。これは、他者観がネガティブなため、なんらかの問題があった時に他者に助けを求めにくくなり、その結果問題を1人で抱え込んでしまい疲れるのではないかと考えられる。内的作業モデルは幼少期に生存のために他者から助けられることで形成されるモデルであり、Bowlby (1973,1991 黒田他訳 1977/1995) 自身も生存が脅かされる時にモデルが活性化されアクセスしやすくなると述べている。ただし、生存が脅かされるといっても、その多くは空腹や排せつの処理など乳幼児にとっての日常的な問題であり、そうした問題が乳幼児の身に起きた時に内的作業モデルが活性化される。また、F5「日常的な疲労感」に含まれる項目も、小さな問題が重なって日々の生活に疲れて

いるという状態を示していると考えられる。成人でも何らかの問題を抱えて他者に助けを求めたい場面で、特に内的作業モデルが作用すると考えられる。例えば、大学生で言えば課題が溜まって大変、授業についていけなくて困る、友人関係に悩むといったことが挙げられる。内的作業モデルが活性化した時、他者観がネガティブであれば他者は自分を助けてくれる存在ではないと認知する可能性が高いため、その結果問題を一人で抱えこむことになって一人で問題を解決しないといけなくなり生活に疲れてしまうと考えられる。

女子では自己観、他者観の片方の影響しか見られない因子が4つあった (Table 6)。F1「集団に溶け込めない」では他者観のみが影響を与えていた。一方、F3「集団内における発言不安」、F4「継続力の欠如」、F6「自分や他人が気になる」では自己観のみが影響を与えていた。F3とF6は対人場面や対集団場面の中における自信のなさを示しており、自分が他者から援助されうる人間であるかどうかというモデルである自己観と関係が強いことは、どちらも自己、特に自尊心に関することであるため妥当な結果である。しかし、男子においてはどちらの因子においても他者観の影響も見られたことから、男子に比べて女子には対人場面で、相手が自分を受け入れてくれる人間かどうかという、他者のことよりも、自分が相手に受け入れてもらえる人間かどうかという、自分自身のことを気にする傾向があると言える。ただし、女子はF1「集団に溶け込めない」では他者観の影響のみが見られた。これは、同じ対人場面に関することであるのに、一方のF3やF6では自己観のみが、他方のF1では他者観のみが影響を与えていることを意味する。F1は集団に入っていく過程での行動や感情を指しているのに対し、F3やF6は集団や対人場面の中で過ごしている過程での行動や感情を指していることから、集団に入る時には他者観が作用し、集団に入ってから自己観が作用するという独特の愛着スタイルの作用が女子においては見られる。言い換えると、集団に入る時はそこにいる人が受容してくれるかどうかを気にして、集団にいる他者の態度に注目し、集団に入ってから自分がそこでうまくやっていけるかどうかを気にして、自己に注目すると考えられる。したがって、集団への適応の過程で、注目する対象が他者から自己へ変化している可能性が示唆された。

特定他者への愛着スタイルと対人不安経験の関係 半知り合いの他者への愛着スタイルと対人不安経験の関係について、男子では包括的モデルの他者観のみが不安経験に有意な影響を与えており、他のモデルは全て除外された (Table 7)。女子では半知り合いの他者モデルの自己観のみが不安経験に有意な影響を与えており、他のモデルは全て除外された (Table 8)。

一方、重要他者への愛着スタイルと対人不安経験の関係について、男女とも重要他者モデルの自己観と他者観が有意な影響を与えており、包括的モデルの自己観と他者観はどちらも除外された (Table 9,10)。

重要他者において有意な影響が見られたのは、特定他者のモデルであったことから、重要他者との対人場面における不安には、その関係に特有のモデルが作用していると言える。ただし、本研究では対人不安というネガティブな概念を扱っているため、愛情などポジテ

イブな概念でも関係に特有のモデルが作用するかは確かでない。

しかし、男子の半知り合いの他者における場合を除くと、いずれも包括的愛着スタイルの有意な影響が見られなかったのは、包括的な作業モデルが特定他者との間の愛着スタイルや文脈にもある程度影響を及ぼすという先行研究 (Pierce & Lydon, 2001 ; Overall et al., 2003) の知見とは異なるものである。これらの研究では、初めて出会った人に対する内的作業モデルは包括的な作業モデルが基になって形成されるという仮説を提唱しているが、この仮説と本研究の結果とを合わせて解釈すると、一度特定他者へのモデルが形成されると包括的モデルは作用しなくなる場合もありうることを示唆される。先行研究で特定他者へのモデルが形成されていても包括的モデルの影響が見られていたのは、日米間の文化差によるものである可能性が考えられる。ただし、愛着スタイルの違いを日米間で直接比較した研究はこれまで行われていないため、本研究の結果のみから愛着スタイルに明確な文化差があるとは断言はできない。

また、半知り合いの他者では、特定他者への愛着スタイルであるにも関わらず、女子の重要他者モデルの自己観からの影響を除き、対人不安経験に対する有意な影響が見られなかったことは、自己観と他者観の両方からの有意な影響が見られた重要他者とは異なるため興味深い。これは、半知り合いの他者との関係においては自己観か他者観のどちらかのみが影響していることを意味する。すなわち、男女で半知り合いの他者への対人不安に影響を与えている愛着スタイルは別々のもので、かつ男子のみ包括的な愛着スタイルも影響を与えているということである。このことから、相手との関係が半知り合いの状態の時は自己観か他者観の片方のみが影響し、相手との距離が縮まるにつれて自己観と他者観の両方が影響するように変化していくのではないかと考えられる。半知り合いの状態であまり接する機会のない相手との関係では、あまり相手を求めようとしないうちに内的作業モデルが作用せず、親密になっていくにつれて相手を求めようとする中で、内的作業モデルがより作用するようになると推測される。

男子での半知り合いの他者に対して、特定他者への愛着スタイルの影響が見られず包括的モデルの他者観の影響のみが見られたことから、男子の場合、半知り合いの状態ではまだ特定の相手に対する愛着スタイルが確立されていないものと考えられる。そのため、特定他者への愛着スタイルの代わりに包括的愛着スタイルが機能していたのではないかと考えられる。男子での半知り合いの他者への対人不安のみで包括的愛着スタイルの影響が見られたことについては、次のように考えられる。「3種類の愛着スタイルの関係」で述べたように、男子は女子に比べて包括的モデルと半知り合いの他者モデルが分化しにくい傾向にある可能性がある。男子の包括的モデルと半知り合いの他者モデルの比較で他者観は有意差が見られた一方で、自己観では有意差が見られなかったことから、他者観が先に分化し自己観が後から分化する可能性があるかと先に述べたが、半知り合いの他者への対人不安経験と愛着スタイルの関係の結果から、他者観も分化が完全には完了していない可能性が示唆された。モデル自体を包括的モデルと特定他者モデルを別々のものであると認め

られるほどには分化が進んでいるが、実際の対人場面でのモデルの機能ということになると、まだ特定他者のモデルのみでは不十分で、包括的モデルが補完している可能性が考えられる。

今後の課題 Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) は、包括的愛着スタイルも少なからず特定の他者との関係にも影響を与えていると述べているが、本研究では特定他者への不安経験との関係を検討した結果、特定他者への不安経験に対する包括的モデルの影響は見られなかった。これは研究が行われた国が異なっていたことも考えられるが、成人愛着スタイルの文化差を直接的に比較した研究が少ないことから断言はできない。また、本研究では対人不安というネガティブな側面から他者ごとに特有の愛着スタイルを検討していたため感情の違いによる可能性もある。ポジティブな側面から同じように検討した場合でも包括的愛着スタイルの影響が見られないのかどうかは今後検討する必要がある。

また、Pierce & Lydon (2001) や Overall et al. (2003) は、包括的愛着スタイルは新しく知り合った他者に対する愛着スタイルが形成される時の原型として働くと述べている。この考えに沿うと、本研究で包括的愛着スタイルの影響が見られなかったのは、半知り合いの状態以上になると既に特有の愛着スタイルが完成し、対人場面に影響を与えるものが包括的愛着スタイルから特有の愛着スタイルに移行している可能性がある。このことを確認するためには他者との関係性をより細かく分け、どの時点で包括的愛着スタイルから特有の愛着スタイルに移行するかを検討する必要がある。

さらに、男女差の検討からは包括的モデルと特定他者モデルの分化のしやすさ、または早さには性差があり、その上自己観と他者観の間でも、包括的モデルから特定他者モデルの分化の開始に時間差があることが示唆された。しかし、包括的モデルと特定他者のモデルの分化が単純な時間経過によるものなのか、相手と親密になっていくことで進むのかは明らかではない。なぜなら、半知り合いの他者より重要他者の方が接する時間は長いと考えられるため、半知り合い他者と重要他者とでは知り合ってから時間に差があると考えられるが、ここには親密さの違いという要因も交絡しているからである。本研究では知り合ってから時間については調査の対象としなかったため、本研究の結果からはモデルの分化に起因するものが時間経過なのか親密になっていく過程なのかは結論づけることはできない。これについては、知り合ってから時間を統制して半知り合いの他者と重要他者への愛着スタイルを調べる、あるいは知り合ってから時間が異なる半知り合いの他者への愛着スタイル同士を比較するなどの方法によって詳しく調べていく必要がある。

半知り合いの他者の場合における愛着スタイルと対人不安の関係と、重要他者の場合における愛着スタイルと対人不安の関係を比較した時、半知り合いの他者では自己観か他者観のどちらか一方のみが対人不安に影響を与えており、重要他者では自己観と他者観の両方が対人不安に影響を与えていることが分かった。このことから、他者との関係が半知りの状態から親密になるにつれ、自己観と他者観のうちの片方からしか影響していなかったものが両方から影響していくようになると考えられる。このことについても、他者との関

係性をより細かく分けた上で検討していくことで、どの段階で影響が片方から両方になるのかを確認する必要がある。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of Attachment : A psychological study of the strange situation*. Hillsdale : NJ. Erlbaum
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults : A test of fourcategory model. *Journal of personality and Social Psychology*, **61**, 226-233.
- Bowlby, J. (1991). *Attachment and loss: Vol2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実朗・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1995). 母子関係の理論 II : 分離不安 岩崎学術出版社)
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003a). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **19**, 59-76.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003b). 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, **74**, 466-473.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, **22**, 274-284.
- 加藤和生 (1998). Bartholomew らの 4 分類愛着スタイル尺度(RQ)の日本語版の作成 *Journal of Cognitive Processes and experiencing*, **7**, 41-50.
- 笠原 嘉 (1977). 青年期—精神病理学から— 中央公論社
- Marteau, T. M., & Bekker, H. (1992). The development of a six-item short-form of the state scale of the Spielberger State-Trait Anxiety Inventory (STAI). *British Journal of Clinical Psychology*, **31**, 301-306.
- 中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?—4 カテゴリー(強制選択式, 多項目式)と 3 カテゴリー(多項目式)との対応性—九州大学心理学研究, **4**, 57-66.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み 心理学研究, **75**, 154-159.
- 西村洋一 (2008). 対人不安とアタッチメントスタイルとの関連についての検討 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, **1**, 261-274.
- Overall, N. C., Fletcher, G. J. O., & Friesen, M. D. (2003). Mapping the intimate relationship mind : Comparisons between three models of attachment representations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1479-1493.

- Pierce, T., & Lydon, J. E. (2001). Global and specific relational models in the experience of social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 613-631.
- 佐々木 淳・菅原健介・丹野義彦 (2005). 羞恥感における逆 U 字的関係の成因に関する研究—対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ— *心理学研究*, **76**, 445-452.
- 嶋野重行・鈴木志穂子・菅原正和 (2004). 青年期における IWM (Internal Working Model) と対人不安 *岩手大学教育学部研究年報*, **63**, 105-118.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 *教育心理学研究*, **29**, 348-353.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— *東京都立大学人文学報*, **196**, 1-16.
- 堤 雅雄 (1992). 想像的他者との心理的距離の関数としての羞恥心 *島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)*, **26**, 87-92.
- 山際勇一郎・堀 洋道 (1991). 他者との心理的距離と評価懸念の関係 *教育相談研究*, **29**, 13-17.